

朝鮮における郡是製絲株式會社分工場の形成過程

山 田 智 子

郡是製絲株式會社は、大正14（1925）年に大田、昭和4（1929）年に清州に分工場を新設し、朝鮮に進出した。両工場の形成過程にみられる共通点は、敷地選定時の都市計画の考慮、本社本工場と同様の配置計画、オンドルや煉瓦造などの現地仕様の採用、指名入札制度による複数の企業の請負工事があげられる。異なる点は、RC造の割合が高い大田工場に対し、清州工場は木造率が高いことがあげられ、その理由を昭和初期の世界恐慌と関連づけて考察した。

キーワード：郡是、朝鮮、大田、清州、製糸工場

1. はじめに

明治後期から大正期にかけて、日本各地の器械製糸場の中から、生産性と品質を高めて外貨獲得に貢献し、全国に展開する大規模な製糸企業が出現した。中でも郡是製絲と片倉製絲の二大製糸は、1920年代以降、高級生糸の生産において他社を大きく引き離す¹。二大製糸は地方の中小製糸工場との合併や自治体の企業誘致などにより、短期間に全国に中・大規模工場を多数設置した。昭和5（1930）年の時点で分工場数は、前者は30ヶ所、後者は35ヶ所にも及ぶ²。

このような分工場の拡大過程の途上で、安価な産繭供給と低賃金労働力の利用を目的に³片倉製絲は大正8（1919）年、朝鮮の大邱にいち早く工場進出をはたした。同年、山十組も大邱に、大正13（1924）年には鐘紡が京城（現ソウル）に製糸工場を設置した。郡是製絲も第一次大戦期の急速な蓄積を前提に独占資本の中核として自らを形成しようとするに際し、遅れさせながら植民地朝鮮に進出していく⁴。

朝鮮では養蚕業が中国から伝来して以降、歴

代の各王朝が養蚕業を奨励してきた⁵。李朝の末期には一時衰退するが、日本統治下において、朝鮮総督府が農家の副業として養蚕に力を入れると、産繭額は一気に増えた。総督府は、大正8（1919）年「朝鮮蚕業令」および付帯法令を發布・施行して蚕種製造の統制を行い、大正14（1925）年に15ヵ年を目標として「産繭百万石増殖計画」をたてた⁶。郡是製絲の朝鮮への進出は総督府から要請を受けたもので⁷、大正14（1925）年に大田工場、昭和4（1929）年に清州工場を相次いで新設している。2つの工場は、大正12年に設置された今市工場以降の新設工場であり、当時の最新の建築技術や工法が採用されたと予測される⁸。

しかし、この時期の海外へ進出した工場のみならず、日本各地の大規模製糸工場の建築史研究については、近代化の発展期として重要であるにもかかわらず、個別事例の報告⁹ばかりで、研究の蓄積は極めて少ない。

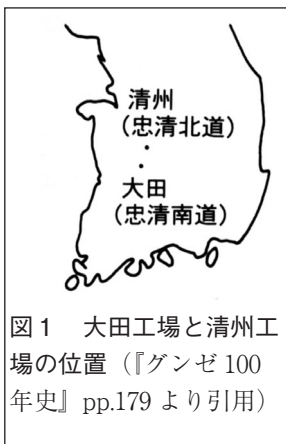
以上のような背景から、本研究の目的は、朝鮮における郡是製絲株式會社分工場を事例に取り上げ、同社の中央集権的な体制を考慮しながらその建設過程に焦点を当てて特徴付けると

もに、工場の立地や形成に関連する都市計画の影響についても建築史の視点から明らかにしようとするものである。

2. 郡是製絲大田工場の形成過程

(1) 大田の沿革

大田は忠清南道の東南部に位置し（図1）、京城と釜山をつなぐ京釜鉄道の開通により急速に発展した新興の都市である。『最新朝鮮・満洲・支那案内』（小西榮三郎編、聖山閣発行、1930）には「凡てが純内地式であることが此の町的一大特色である」と記載され、『昭和十二年度大田府勢一斑』でも「内地式都市」を大田の特色にあげている。この「内地式」というのは、当時の地図や郷土資料に目を通す限りでは、大邱のように城壁で囲まれた旧市街地が存在せず、直交する造成された道路によって街区が囲まれ、その集合体として都市が形成され、当時の日本本土の都市に見られた建物が並んでいる¹⁰ことをさしているとみられる。



郡是製絲が進出する以前の大田市街の状況については『大田發展誌』（田中麗水著、田中市之助発行、1917年）と『忠南産業誌』（田中市之助、大田實業協會発行、1921年）が詳しく、それらを以下に要約する。

大田は「唯見渡す限り荒茫たる平野にして十里の境域一戸の内地人を見るに能はず寂寞タル一寒村」¹¹に過ぎなかったが、明治37年の京釜鉄道速成工事の着手と共に内地人が移住し始め、

その数は188名となった。この敷設の際にこの地が大田と名づけられた。大正3年、湖南鉄道が開通し交通の要衝となってからは当地方の経済の中心地として発展し、大正6年6月現在の人口は、内地人4,964名、朝鮮人1,800名、外国人63名の合計6,827名となった。

市街地である大田面区域は面積40余万坪に過ぎない¹²が、周辺の準市街地を加えるとその周囲は二里十町ともなる。市街は南北に走り、東西に短く、中央に大田川が流れる。

市街の町里は、本町一丁目、二丁目、春日町一丁目、二丁目、榮町の三町を中心として大東里、鉢岩里、連孝里等がある。これらは新設市街として大正3年3月に整理された町名である。

道路は、本町、春日町通りが幹線として幅員を四間とし、その他の街路も三間乃至二間半を下らず、路面は石造で下水暗渠及び開渠を設置していた¹³。

当時は「春日町二丁目（木尺）は近年著しく発展し大田の将来此の方面に向て延長すべし、亦た鉢岩里、大東里は郊外として市の膨張に伴ひ住宅向の敷地に適し連孝里即ち市の西北部は指定工業地たる可し、近年工場新設の機運に向ひたれば同方面の土地には将来大建築物の建設をみる可し、ならん」¹⁴「将来は西南方面に発展し東北は郊外として工業地たるに適す」¹⁵と見込まれていた。さらに将来の問題として、当時の道庁が交通不便な広州にあったため大田を移転の候補地としてあげ、「道廳移轉の要」とされていた¹⁶。

(2) 郡是製絲大田工場の建設過程

大田工場設置までのいきさつと、操業当時の昭和元年度から同4年度までの経過の詳細については『大田工場沿革史』として記録され、ゲンゼ株式会社人財開発室資料室に保存されている。これは昭和5年7月に庶務係の真下兵蔵に

よって書かれた手書きのものである¹⁷。ここでは工場の建築工事にかかわる文の引用を入れながら建設過程を見ていく。

大正8(1919)年10月、朝鮮総督府から工場設置の要請を受け¹⁸、工場敷地として大田の鉢岩里に白石鉄次郎が経営する果樹園31,087坪を購入した。しかし、同年の蚕糸業の不況により工を起こせず、翌9年は元の持主に現状のまま貸与していたが、大正9年10月21日の取締役決議の決定により工場設置は延期され¹⁹、土地登記後の大正10年からは郡農農場として技術者を雇用し経営にあたることになった。

大正14(1925)年を初年度とする朝鮮総督府の「産繭百万石増殖計画」がたてられたのに際し、工場建設が決意された。本町二丁目の元煙草専売局出張所跡地帯が郡農農場敷地と交換され、これを工場敷地として大田工場が建設された。もともと郡農農場敷地は「高層住宅ニ適シ市街拡張上工場ヲ此地点ニオカル、コトヲ好マズ又水質水量共不充分ニシテ製絲工場ニ不向ノ嫌アリ」とされており、土地の交換は、大田郡守、大田面長(元の農場主である白石鉄二郎)や地元有力者の協力により促進された²⁰。

さて、工場建設の着手にあたって、当時の今市工場長であった長池幸助が工場長に任命された²¹。長池は任命されると、朝鮮の現地調査を行い、一端帰国して本社で14年度工事計画を完了してから大正14年9月13日に大田に着任した。同月16日より「敷地内ニ於ケル建物配置標杭ヲ施ス可ク測量ヲ宮本常吉氏ニ又大工ヲ明田漁之助氏ニ請負シテ」準備にかかっている。

10月3日、建設課長服部済人と大田工場建設主任吉本朝男が来場し、執務に着手した。7日午前9時から中尾常次郎(地元の有力者)宅にて末吉組他12名の指名請負業者が出席した。繭倉庫の現場説明及設計書を渡し、同日午後1時

から同宅にて繭乾燥場並びに繭取扱場に対し、京城大倉組他10名が指名請負業者として出席し、現場説明及設計書を渡した。

9月11日(10月11日の誤記か?)から元煙草専売局事務所建物を修理して事務所を開始し、当日繭倉庫の入札を開封し「最底入札額壹萬九千八百六十参圓ニテ大田明田漁之助氏ニ又繭扱場及乾燥場ハ四萬参千貳百圓ニテ京城大倉組ニ落札イヅレモ契約締結工事着手セシメタ」とある。

工事は、建設課の吉本朝男と建設係藤野東吉(11月16日着任)が請負者を督励して進められた。「繰糸場 男子寮 女子寮 撰繭煮繭場 男子及ビ女子浴場、門衛所及堀 其ノ他附属建物ヲ工事締結シ煙突ハ東洋コンプレッセル会社ニ食堂及炊事場 再繰場ヲ京城茅田組ト契約シ建設ニ件リ機械据付ニハ本社機械課ヨリ坂井吉之助氏出張シ職人ヲ督シテ作業ニ励ミ帯川乾燥機ヲ始メ繰糸、再繰、気缶気機 ライスボイラー据付等日夜工ヲ急ギテ順調ニ進」んだ。6月上旬には第一期工事を完了し、6月14日に職工が入社し、128釜が繰業した。当日は来賓30余名が来場して入場式を挙行了した。

その後、「九月上旬第二期工事に着手シ繰糸場百二十八釜養成工場六四釜之に伴フ繭倉庫女子寮舎ヲ契約工ヲ起シ」ている。

昭和2年度は、大田とは別の土地にある洪城乾燥場敷地を地質の関係上洪城駅前と買換え、2月9日(昭和2年度の中に記載されているが、文の構成上、前年度と思われる)、乾燥場工事を京城茅田組と契約している。

5月14日に来賓174名を迎え開業式を挙行。そのときの白石大田面長の祝辞には、「最新式ノ乾繭場ト工女ノ「オンドル」ト内鮮ノ知識を網羅シ総テ場長以下苦心ノ余ニ成レルモノ真ニ朝鮮ニ於ケル理恵的製糸工場ト謂フベキナリ」とある。

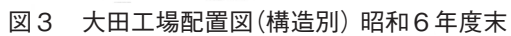
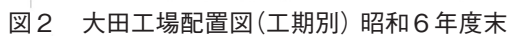




図4 元郡是農場と大田工場の位置
(1 : 30000)
(『昭和12年度大田府勢一斑』付図に記入)

6月には吉本建設主任と藤野建設課員は「工事竣工ニツキ熊本工場ニ引揚」ている。

第二期工事は「繰糸場一二八釜増設廻転ヲ為シ養成工場六四釜ヲ起シテ合計三二〇釜ノ運転ヲ見ルニ至レリ 此ノ外女子寮二棟半甲号社宅一住乙号社宅式棟四ヶ住 繭倉庫一棟 帯川乾燥場中原乾燥機設置、屑物場、精米場、漬物倉庫、野菜貯蔵庫事務所等附帯建築及機械据付ヲ見ルニ至レリ」とあり、洪城乾燥場は「帯川乾燥機械室事務所附キ繭扱場ヲ京城彦田組ニ契約」している。

昭和3年度は、「増釜ニ伴ヒ病院ノ増設ト女子寮事務所ノ必要急ニ迫リ明田漁之助氏ト契約四年四月上旬完成茲ニ於テ附帯建造物ハ先ツ申分ナキ設備ヲ見タリ」とあり、この時点で工場が完全な状態として竣工したことを示している。

昭和4年度は、概況に世界恐慌によって糸価が大暴落したことについてその経過や対策などが刻々と書かれている。

(3) 大田工場の建設過程及び配置と建築構成の特徴

昭和6(1931)年度末における大田工場の配置図と当時の全建物の仕様が記載された土地建物調査表及び『大田工場沿革史』に記載された各期の建物の仕様をもとに、竣工時期別に各建物を表示した配置図(図2)と構造別に建物を表示した配置図(図3)を作成し、考察を行う。

まず、大田工場の建設過程に関する特徴は4つある。

第一は、敷地の選定にあたって都市計画が考慮されたことである²²。当初購入した農場敷地が製糸工場にとって水質水量が不十分であることは致命的であるが、ここではそれと同等のレベルに都市計画上適さないことをあげていることに注目したい。この農場敷地は、駅前からまっすぐ延びる春日町通りの約1km先の正面にあり、建物が建設されるとアイストップとなる位置にあった(図4)。交換された工場用地は駅前から鉄道と平行に走る主要幹線の本町通り沿いにあり、ここからも駅前まで約1kmの距離にあり、交換条件としては最適の土地であったとみられる。結局、元の農場敷地には昭和7年に道庁が移転し、新築された。現在も高層ビルが並ぶ中であって道庁としてその姿をとどめているが、大田駅と1km隔てて対面する姿は地域のランドマークとなっている。

第二は、工事は、建物を細かく分けて複数の施工会社が工事を請け負うジョイント・ベンチャー方式を採用していることである。現在も大規模な建設工事の際には頻繁に行われている近代的な方式である。図3と『大田工場沿革史』より判断できることは、鉄骨造・鉄筋コンクリート造の建物は京城大倉組と京城彦田組が請負い、木造の建物は地元の明田漁之助が請負っている。指名入札で施工者が決められたが、当時

の施工技術も考慮されていたとみられる。

第三は、同社の建設課が設計・監督を行い、主体的に建設工事にかかわっていることである。しかも、極めて組織的に動いている。これは鐘紡にみられる外部の建築事務所への委託²³とは正反対である。

社内で建設工事の設計から発注及び現場管理までを行うことは、建設費用を安くおさえられること、現場の状態に応じて迅速に動けることなどがあげられる。短期間に多数の分工場を建設できた背景には、建築技師を社内にかかえるという利点があったことを改めて強調したい。

第四に建物の建設順序が序列化していたことである。最初に着工したのが原料確保に必要な繭乾燥場と繭倉庫であるが、操業の春までに原料繭を確保して貯蔵する必要があったからと判断できる。次に繰糸場・再繰場・汽関場と寮舎・食堂・浴場などの基本施設が、将来の増築を計画に入れ、空間を残して建設されている。

次に、本社・本工場の配置の特徴と比較すると、大田工場の配置や建築構成には以下のような特徴が見受けられた。

- ①食堂・浴場などを中間において生産施設と女子寮を明確に分ける。また、男子寮舎は生産施設の近くに、女子寮舎はそれとは反対側に設置する。この配置は本社・本工場と同様である。
- ②道路を隔てて社宅街を設ける。
- ③食堂と炊事場の大スパン建物を鉄筋コンクリート造にして中央に置き、その西端に煉瓦造の事務所、東側に带状に鉄筋コンクリート造の女子洗面所と側を煉瓦造にした木造の女子浴場を置いて、中央に防火帯を構成している。また、大型の再繰場も煉瓦造にするなど、煉瓦造の積極的な摂取がみられた。内地に設けられた当時の分工場には煉瓦造はほとんどみられないことから、朝鮮という地域性がここに見出せる。さ

らに大正12年以降に建設された同社の分工場の大部分には鉄筋コンクリート造の防火壁が設置されるが、朝鮮では煉瓦造になっている²⁴。

④オンドル（図5）が寮舎・事務所・社宅に採用されていることは朝鮮工場の特徴としてすでに指摘されているが、当時の現地においてもその採用が話題になっていた。



図5 大田工場女子寮写真(オンドル付)
(グンゼ(株)所蔵)

3. 郡是製絲清州工場の形成過程

(1) 清州の沿革

清州は忠清北道の中西部に位置する（図1）。郡是製絲が進出する以前の清州については、『清州ト大清州建設 大清州』（三浦斧吉、齋藤金蔵発行、1921）と『清州沿革誌』（大熊春峰、大熊彌三郎発行、1922）に詳述されている。以下にそれらを要約する。

清州は百済以前から存在する歴史的な街である。百済時代には上黨城、新羅時代には西原小京が置かれた。高麗時代に清州と称され、李朝時代には觀察府が置かれたこともあった。当時の清州は城壁に囲まれており、北門・南門・東門を備えていた。

近代になると、南門と無心川にかかる石橋北詰の間が清州の繁華街となった。明治39（1906）

年大洪水に見舞われ、石橋南詰にあった市場など多くの家屋が流されたため、市街は再編成された。明治43（1910）年の日韓併合により道庁が置かれると、市区改正として城壁が壊され、その石を利用して新たに下水溝が設けられ、石橋より北門に通じる幹道（本町通）が改修された。これを手始めに縦横に街路を通し、整然として碁盤の目に似た市街を形造った。大正2（1913）年、市街地の土地調査が終わると同時に、本町、旭町、相生町などの新名称が命名された。

また鳥致院街道と忠州街道が主要幹線であるが、大正9（1920）年に中央鉄道忠北線が開通すると当地方の交通の中心地となった。

大正10（1921）年には、大清州建設をめざして市街を整理するため、清州土地建物株式会社が創立された。事業は清州駅付近の新拡張地域内に5千坪の土地を以って住宅難の緩和をはかることであり、この地域は本町6丁目として新市街を形成しつつあった。

また、行政区域を拡張し、市街地区の設定を計っていた。即ち北方拡張地域を清州に包括して、全体を商業地区、工業地区、小工業及家内工業地区、倉庫及運送業地区、住宅地区、公園地区、混合地区、予備地区の8区に設定することである。そのうち工業地区は「風下ニシテ停車場トノ連絡圓活ナル市街の東方部約五万二千四百坪ヲ主要地トシ悪臭其他公安上些モ害ナキ工場ハ本地區以外ノ地ニ選定スルモ差支ナキモノトス」としていた。

（2）郡是製糸清州工場の建設過程

清州工場（図6）は昭和4（1929）年11月4日に184釜で事業を開始した。工場の位置は清州面和泉町180番地で、新旧市街地より西方の無心川を越えた鳥致院街道沿い（図7）である。

清州工場に関する資料は少なく、建設過程の詳細まではわからない。そこで、当時現地で発

行された新聞『湖南日報』昭和4（1929）年10月3日付けの記事からその様子を把握する。

「清州の郡是工場 愈々始業間際に迫る
工女優遇に努む

忠北産繭界に黎明を投じた郡是製糸清州工場は起工以来一瀉千里に竣成を急ぎつゝ、あつたが今や全く其準備が出来上った 工場の大規模であることは流石大工場を以つて誇るに足る 實に堂々たるものである 一萬五千坪の廣莫たる敷地に棟から棟を連ねられた建築と百二十尺の大煙突は清州に入るものゝ、齎しく眼を見張る處である 此工場が他工場に比し異なる點は總てが精神的で人格に重きを置き工場全員が眞の事業に生きることであらう 尚女工等に對せる衛生設備は充分行届いた觀がある 即ち女子寮は彼等工女達の寢室であるが暖房装置はスチームによって完全に施されまた寢具は新調度品を使用するやう専門裁縫工を雇入れて布團を作つて居る

今期の女工募集は三百名であつたが第一回入社すべき先發隊ともいふべき者百名は十一月十日までに入社し直ちに教師の指導をうけ操業の準備にかゝる筈であると斯くして内容は遺憾なく進められ十一月下旬若くは十二月一日を以つていよいよ大工場の始業となるべく轟々たる音響が清州の中空に漂ふのも短期日に迫った 因に女子寮は清州松江組に工場は京城多田工務所



図6 清州工場写真(グンゼ(株)所蔵)



図7
清州工場位置
縮尺1：50000
(『清州』大正3年
測圖昭和11年修
正測圖、陸地測
量部発行)

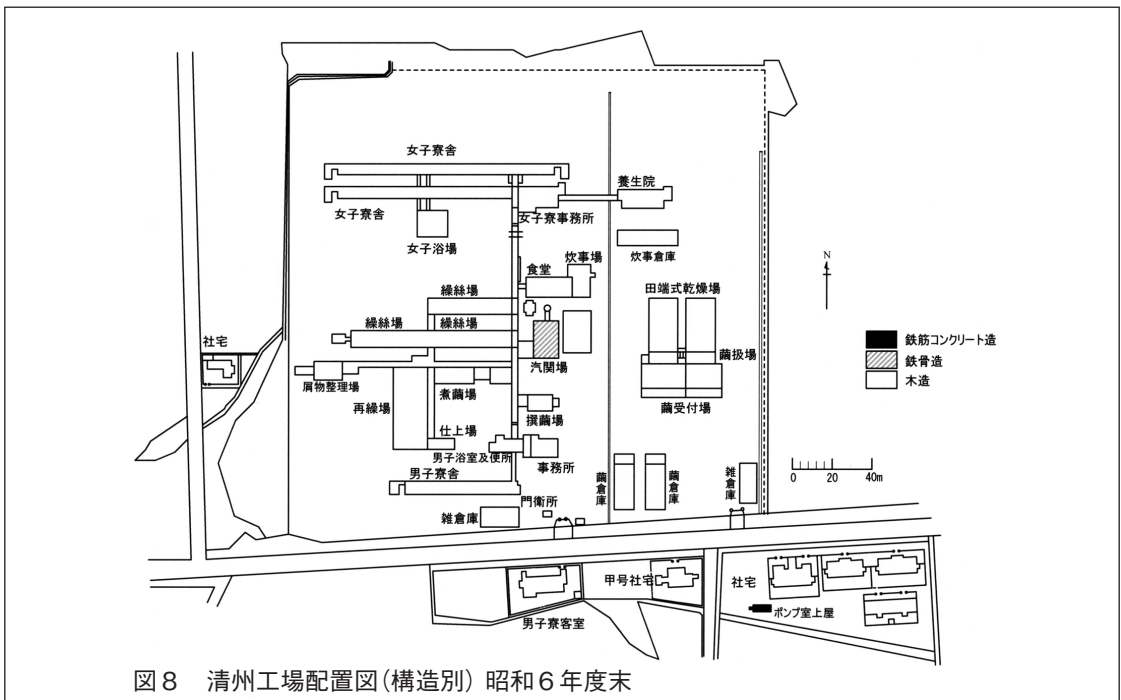
へ事務所醫療所は大倉組へ社宅は忠州水黒組によつて夫々工事が進められて居るからいづれも年内には全部の落成を見るであらう」(処々の一字分の空白は筆者が入れた)。

また、清州工場は大戦後「帰属財産の管理工場として運営され、1954年9月に南韓製絲株式會社に払い下げられ、(1961年)現在も運営中で道内の産繭を製糸している」²⁵ことが判明している。

(3) 清州工場の配置と建築構成の特徴

昭和6年度末における清州工場について構造別に建物を表示した配置図（図8）を作成し、新聞記事なども参考にしながら大田工場と比較すると、以下のような特徴が見出せた。

- ①食堂・浴場などを中間において生産施設と女子寮を明確に分け、男子寮舎は生産施設の近くに、女子寮舎はそれとは反対側に設置しており、大田工場や本社・本工場と同様である。
- ②大田工場同様、道路を隔てて社宅街を設ける。
- ③ポンプ室上屋（鉄筋コンクリート造）・汽関場（鉄骨造）を除くすべての建物が木造で、非木造の耐火建築物の割合が少ない。ただし2箇所防火壁は煉瓦造にして、防火区画を設ける。
- ④オンドルが寮舎・事務所・養生院・社宅に採用され、「スチーム」と紹介されるなど、大田工場同様、当時の現地でも話題性が高かった。
- ⑤ジョイント・ベンチャー方式をとっている。



4. ま と め

大田と清州の工場について建設過程をみてきたが、2つの工場が大きく異なるのは、建築構造である。大田は鉄筋コンクリート造・煉瓦造・鉄骨造の割合が高いが、清州工場は極端に少なく、ほとんどの建物が木造といってよい。

この理由は、建設時期は4年しか離れていないが、この間に世界恐慌があったためと考えられる。特に同社の製品は米国への輸出に頼っていたから、その打撃は大きかったといえる。鉄筋コンクリート造などの非木造耐火建築物は、木造に比べて非常に高価であるため、建設工事費のコストダウンを行った結果であろう。

また、同社建設課は大正6年に発足しているが、朝鮮工場への進出はその8年から12年後ともなり、すでに配置計画や各施設の標準仕様などが確立していたとみなせる。一方で朝鮮という土地柄を考慮し、現地仕様の設備や材料を採用していたことに技術レベルの高さを感じ取れる。本研究により、企業内建築技師の組織的な活動の実態を明らかにすることができたように思う。

今後は現地調査で収集した資料を基に、工場の進出による地域の近代化過程に焦点をあてて研究していきたい。

謝辞 本研究を進めるにあたり、グンゼ株式会社の大井重夫氏、グンゼエンジニアリング株式会社の大槻克之氏・松木栄一氏・西村光代氏には多大なご協力をいただきました。ここに記して謝意を申し上げます。

また、韓国の資料調査については京都工芸繊維大学の石田潤一郎教授と金泉科学大学の金珠弥先生にご教示を賜りましたことに謝意を申し上げます。現地資料調査の際にはソウル在住の阪上真紀氏に通訳としてご協力いただきました。

ことにも、謝意を申し上げます。

本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究C「郡是製絲株式會社における分工場の形成とそれによる地域の近代化に関する建築史研究」の成果の一部である。

註

- 1) 石井寛治：『日本蚕糸業史分析』東京大学出版会、pp.90の2～3行目、1972に、「この両製糸は、靴下用の高級格生糸生産において、他製糸の追隨を許さぬ高度の生産力水準を確保しつつ、隔絶した高蓄積を達成してゆく」とある。なお、「郡是製絲株式會社」などは固有名詞として当時の旧字体を使用している。
- 2) 瀧澤秀樹：『日本資本主義と蚕糸業』未来社pp.161～179、1978に記載された郡是製絲と片倉製絲の昭和5年度までの工場増設の一覧表による。
- 3) 前掲2) pp.171の8行目～pp.172の2行目
- 4) 前掲2) pp.165の10～14行目
- 5) 出田正義：『統制ある蠶絲業の朝鮮』周防時雄、pp.1の1行目～pp.3の11行目、1934
- 6) 藤井光男：『戦間期日本繊維産業海外進出史の研究』ミネルヴァ書房、pp.419の1行目～pp.423の1行目、1987では、「日韓併合」後、朝鮮蚕糸業は日本製糸資本に対する原料繭供給者としての位置を占めていたが、1925年以降は低廉な生糸の供給者として特化させることになったと指摘している。
- 7) 朝鮮への進出経緯については、『郡是製絲株式會社六十年史』郡是製絲株式會社、1960、『グンゼ株式會社八十年史』グンゼ株式會社、1978、『グンゼ100年史』グンゼ株式會社、1998に概略が記載されている。
- 8) 山田智子・大場修「昭和6年度末における郡是製絲株式會社における分工場の建築構成について ―近代製糸産業の形成過程に関する建築史研究その10―」日本建築学会大会学術講演梗概集2009では、朝鮮の2工場において平屋が80%を超えているのは「通常建築面積の大きい2階建ての女子寮が平屋で建てられているからで、その理由は温突を取り入れたことによる」としている。

- 9) 例えば、郡製糸が参考にした室山製糸場は『三重県の近代化遺産総合調査報告書』に、石川組製糸工場は『埼玉県の近代化遺産総合調査報告書』にあるように、多くは近代化遺産総合調査報告書などで個別に報告されている。
- 10) 田中麗水：『大田発展誌』田中市之助発行、pp.7の1～3行目、1917年によると、「大田地方は他地方に見る温突家屋なるもの少く希少な豚小舎の藁屋根を認めず、是全く新設市街にして」とあるので現地に固有の建物が少なかったことから「内地式」という用語を使ったものとみてとれる。
- 11) 田中市之助：『忠南産業誌』大田實業協會発行、1921年のpp.181の12行目～pp.182の1行目
- 12) 大田面の「面」は当時の朝鮮の行政区分のひとつである。内地人が多いため大正6（1917）年より教育を除く事業を面が経営する指定面となった。昭和6（1931）年には大田邑と改め、昭和10（1935）年には大田府となった。この状況は急速な発展を裏付けている。
- 13) 前掲10) pp.6の6～9行目によると、「春日町一丁目、本町一丁目、二丁目（市場）は繁栄地にして家屋櫛比し殆んど空地を餘さずとも雖も、猶ほ所々に小さきは二、三百坪乃至数千坪の空地を有し、…市街目抜きとして人の利用を待てる状態にあり」とあり、これらの町にふさわしい新しい建物が待ち望まれていた。
- 14) 前掲10) pp.6の9～12行目
- 15) 前掲10) pp.6の2行目
- 16) 前掲10) pp.139の1～pp.140の8行目
- 17) 真下は大正11年2月に大田に同社農場会計係として着任、3年半後に大田工場の建設が始まると同工場の庶務係に就任している。
- 18) 同社が朝鮮に製糸工場を設置した理由は、大正8（1919）年10月、社長の遠藤三郎兵衛らが朝鮮を視察した際、朝鮮総督府から「朝鮮蚕業啓発ノ為メ南鮮ノ適地ニ工場ヲ設置スル様」勸奨を受け、次いで忠清南道庁を訪問の際には知事から「将来道内ノ産繭全部ヲ消化スル機関トシテ完全ナル規模ノ製糸工場ヲ忠南ノ要都大田ニ建設セヨ」と要請があったからである。
- 19) 『グンゼ株式会社八十年史』グンゼ株式会社、pp.267の16行目～p.268の9行目、1978
- 20) 『大田工場沿革史』によると、このときの状況について、約2年後に挙行された工場の開業式で工場長は以下のように述べている。「規模一千釜ノ工場用地トシテ御当局ノご斡旋ノモト大田鉢岩里ニ三一〇八七坪ノ土地ヲ買収シマシタ后其ノ水質水量ヲ精査シマスニ何レモ不充分ナルノミナラズ大田都市将来ノ発展上ヨリ考慮ノ結果他ニ変更ノ余儀ナキニ至ッタノデアリマス 爾来候補地ヲ物色中偶々大正十四年三月大田面官民有志諸賢ノ誠意アル御奔走ニヨリ水質水量並ニ業生ノ適地タル現在ノ敷地二六〇六九坪ト交換スルコトニ決シマシタ…敷地交換ノ為ニ大田面有志諸氏ガ新タニ土地会社ヲ設立サレ犠牲的の出資ノモトニ御後援ヲ賜ッタコトハ銘記シテ感情措カザル所デアリマス」
- 21) 今市工場は大正12年に建設された同社初の新設工場で、これまでの工場の建築構造とは違っており、鉄筋コンクリート造の割合がずば抜けて高かった。その場長を朝鮮進出の第一歩となる大田工場の場長に任命することは、同社の期待感のあらわれであったといえよう。
- 22) 孫禎睦、訳（西垣安比古、市岡実幸、李終姫）：『日本統治下朝鮮都市計画史研究』柏書房、2004によると、都市計画法のようなものが朝鮮半島内でも早く制定・施工されねばという動きが1920年代の初めから芽生えているとしている。
- 23) 平井直樹「日本統治期の朝鮮における紡績工場建築—鐘淵紡績工場の分析を通して—」日本建築学会大会学術講演梗概集、2009
- 24) 西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、2008によると、1913年に朝鮮総督府が市街地建築取締規制を府令として公布し、市街地の中に建てられる工場も規制を受け、防火地区に指定された地区内に建てられる建物や工作物について防火規定が設けられている。
- 25) 趙健相『清州誌』清州市誌編纂委員会、pp.398の11～14行目、1961